

大正十四年一月

一日 正月ダ、正月ダ、何と輝カシク勇シク吾人ノ耳朵ニ響ク事ヨ、吾人ハ徒ラニ軒上ニ
翩翩タル御旗ニ大平ノハルヲ寿ギ、地上ニ紛々トシテ打敷ク北海ノ花ニ天上ノ祝福ヲ喜
ブ以前ニ、非常ナル覚悟ト意気トヲ以テ将ニ押シ寄セ来ラントス新年ノ荒波ヲ乗り切ル
可ク支度セネバナラナイ。現在ニ樂觀シ現実ニ満足シテ以ッテ能事之終レリト爲スノ愚
ヲ止メテ、危険ト困難トニ充チタ未来ノ天地ニ活躍ノ歩ヲ進メナケレバナラナイ。古キ
因習ト朽チカ、ッタ伝統ニ嚙リ付キ、一顧ノ価値ナキ偶像ニ拝跪スルノ無智ヲ排シテ、
創造ト自由ノ栄光ヘノ礼賛ニ走り赴カネバナラナイ。野風吹き捲リ草味清新ノ新開地ニ
ソノ■史ヲ誇ル我青年寄宿舎ハ茲ニ更ニ新ナル根底ヲ築カネバナラス。

吾人ハ何処マデモ自ラ造リ自ラ拓イタ生活ニソノ全身ヲ託スダケノ結城ト大胆トガナ
ケレバナラナイ。人間生命ノ大事实ヲ深刻ニ徹底的ニ現在及ビ将来ノ生活上ニ印象付ケ
証拠立テネバナラス。吾人ハ茲ニ目出度キ新春ヲ迎ウルニ当リ愛スル舎ノ為ニ、舎永遠
ノ偉大ノ為ニ、イヨ□□此ノ感ヲ深クセズニハ居レナイ。

本日午前八時半ヨリ一同食堂ニ集リテ所謂オ正月ノオ祝ヲヤル、久シ振リノ雑煮ニ一
同舌鼓ヲ打ちテ椀ヲ重ネタ。十時学校ノ拝賀式ニ参列ス、萬事緊縮ノ折柄、恒例ノ餅ノ
ナカリシハ遺憾ノ極ミナリシ。午後ハ大半円山ニスキート洒落コム。夕食後一同食堂ノ
ストーブニ当リテ、兼ネテ来舎中ノ先輩丹治氏ヨリ米国留学中ノ追懐談ヤ見聞談ヲ面白
ク拝聴ス、九時二十分同氏帰途ニ付カル。其ノ際左ノ寄附アリタリ。

一、 金一封、一聖フランシス

二日 先生ノ御招待ニ因リ午後七時打揃ッテ参上ス。先生ノ心カラノ御モテナシニ一同時
ノ更クルハモ知ラズ歡ヲ尽シ十一時過ぎ帰舎。

五日 午後六時ヨリ新年茶話会ヲ催ス。御馳走ハ蜜柑、菓子、ソバ（但シ三杯以下）ノ三
種、各自トランプ、カルタ、将棋等ニ打興ジ十時半散会。

八日 今日ハ第三学期ノ初日ナリ、一同久シ振リニ登校ス、前学期ノ試験ニコンデヲ採リ
シ者ハ更ナリ。其ノ他運佳ク相当ナル成績ヲ得シモノモ皆一致シテ「此学期コソハドウ
シテモ頑張ラネバナラス」ト口ニ奮励ノ声アリ、顔ニ改悛ノ色アルゾ頼シクモ又ソノ情
ヤ愛スベシ、好漢願ハクバオッコチルコト勿レ。有志七名スキーニテ三角山ニ登ル、後
カラ考ヘテ滑ッテ降りタノカ、転ンデ降りタノカ、ワカラザリシモノ数名アリキ、夜笹
田、平野ノ両君帰舎サル。

十二日、兼ネテ盲腸炎ニテ大学病院ニ入院加療中ノ江尻君目出度ク全快、本日退院帰舎サ
ル。

十三日 夜来ノ暴風雪猶止マズ、一日中荒レクルイタリ。

十四日 本日モ相変ラズ風暴レ雪吹きテ何日治マルトモ判ラズ、為ニ舎庭ノ老榆打ち振ヒ
テ折レン許リナリ。朝赤羽君帰舎。

二十二日 午後六時ヨリ決算ヲ行ウ、結果左ノ如シ

食費一日分 六十三銭

一人前二十六円（但シ電燈十六燭使用）

二十五日 昨日、今日ノ両日三角山附近ニ於テ全国スキー選手権大会予選及北海道スキー選手権大会行ハル。今日ハ日曜日ノ事トテソレヲ見ニ行ク者多シ。

二十八日 今日ヨリ向フ五日間舎生一同紅白兩組ニ分レ、ピンポン仕合ヲ行フコトトナル

三十一日 三学期最初ノ月次会ヲ開ク、委員ハ笹田、西潟、笹部、伊勢田ノ四君。来賓トシテ今井、笹部ノ二先輩見エル。遅ク奥田君来ル。笹部君先ヅ立ッテ開会ヲ宣シ漸次左ノ諸君ノ演説アリタリ。

波木居君＝副舎長トシテノ月次の挨拶以外ニ、今夜ハ特ニ犠牲的精神、常識的行動、其他団体生活ノ自覚等ニ就イテ懇々ト舎生ヲ戒飾ス。

平川君＝子女日常ノ遊ビ中ニ存ス虚榮の慾望ニ言ヲ始メテ、人間一般ノ虚榮本能ヲ非難シ、更ニ話ヲ変ジテ長髪ニ及ブ、長髪ハ以ッテ虚榮ノ具体的発現ネリトハ云へ、ソノ本質の価値ハ衛生ニアリトナシ世界分明ノ進展ハ因ッテ以ッテ長髪ニカヽルト絶叫ス。

平戸氏＝カラー氏ノ長逝ヲ縁トシテ人間ノ死ニ對シ哲學的考察ヲ述ブ。君ノ説ヲ要約スレバ、人間ヲ以ッテ自然ノ一部トナシ死ヲ以ッテ自然ノ究意の運命ニ必然スル附随的ノ自然現象トナスニ有リ。

平野君＝現今、資本主義的社會ニ呻吟スル一般民衆ノ生活ト往古平安朝時代ニ於ケル朝野ノ遊惰、安逸、有閑生活トヲ較論シテ文明ノ恐慌ヲ陳ブ。

福嶋君＝我舎近来ノ長髪ノ流行ヲ以ッテ貴イ人間性ノ自然的発露ト見做シ、萬事此ノ調子ヲ以ッテ眞実ノ生命ノ自由ナル伸展ヲ望ンデ降壇。

時田君＝トルストイヲ引張り出シテ平戸君ノ説ヲ難ジ、平戸君ガ人間ヲ以ッテ自然ノ一部トナシタルニ對シ、自然ハ神ガ人間ノ為ニ態々造ッテクレタ樂園ナリト論ジテ、君ノ現在スル信仰觀ノ一斑ヲ披■ス。

江尻君＝君ガ最近不幸ニシテ盲腸炎ニカヽラレ、ソガ手術ノ為大学病院入院中與ヘラレタ舎生ノ友情ニ對シ感謝ノ意ヲ述ベテ降壇。

川島君＝札幌組合教會ニテ行ハレタ、カラー氏告別式参列ヲ機トシテ久シ振リニ札幌市中ヲ彷徨イタ所謂衛生所見トデモ云ウベキモノヲ滑稽的ニ話サル。

笹田君＝私ガ壇上ニ立ッテ見テモ、話スベキ種ノナイノハ之皆私ニハ確タル人生觀ガナイ為デアロウト簡單ニ片付ケテ退カル。

矢田君＝何モノカニ趣味ヲ持ッタ生活、或ハ何モノカニ自己ノ全精神、全生命ヲ傾注シ得ル如クニ生活スル者ノ幸福ヲ論ジテ退壇。

白根君＝人生ヲ以ッテツノ螺旋ト見做シ人生ノ兩半面ハル歡樂ト悲哀トヲ以ッテ螺旋ノ外側ニ於ケル單ナル一進退ト假定シ、以上ヲ根拠トシテ今仮リニ螺旋ノ中心ヲ人生ノ成功トナサンカ、其処ニ達スル唯一ノ道ハ悲觀ヲ排シタ不断ノ充實、緊張生活ヨリアルナシト結ンデ降壇。

濱本君＝限りナキ苦悶、極リナキ哀愁ニ満チタ吾人ノ人生ヨリ超脱スル唯一ノ方法ト

シテ死？永キ恋？ノ何レカヲ選ブヨリ外ナシト云ウ。而シテ君ノ望む永キ恋ニ生キル為ニハ虚偽ト一時的倦怠ヲ排セザル可カラズト論ジテ降壇。

今井君＝與謝野鉄幹カ誰カノ歌ニヒントヲ得テ、吾人ノ生活ハ収支緊張シ充実シタモノデナケレバナラヌト語ラル。

笹部君＝邦樂ノ日々ニ衰へ、而シテ洋樂ノ愈々隆盛ナラントスルヲ嘆ジテ、栄アル和樂ノ史ノ發達ヲ長時間ニ亘リ縷々述ベラル。

閉会后、新聞雑誌ノ競売アリ、ソノ成績左ノ如シ。（略）

二月六日 午前十時ヨリ中央講堂ニ於テ大学令發布第七回紀念式アリ、一同参列ス。午后ヨリ我舎年中行事ノ一タルピンポン大会ヲ行ウ、結果左ノ如シ（略）

我舎年中行事ノ一タル手稲登山ヲ試ミシガ雪質ノ悪シキ、雪ノ深キニ加フルニ大吹雪ノ為、遂ニパラダイス附近ヨリ引キ返ス。カヘスガヘスモ残念、憤激ノ至リナリキ。

因ミニ当日ノ参加者左ノ通り。笹部先輩、多勢、平川、伊東、平戸、笹部、杉本、笹田、福嶋。

二月十五日 前回ノ失敗ヲ遺憾トシ笹部（先輩）、平戸、笹部、伊東、川島ノ五君ニヨリテ手稲登山ノ再挙ヲ図ル。此ノ日幸ニ天候静穏、加ウルニ雪質良ク痛快ノ極ナリシト。

二月十七日 火曜日、九時半ヨリ道場ニ於イテ桜星会ノ送別会兼青葉主事渡欧ノ送別式行ハル。

二月二十一日 夜、土井、笹田、小林（旧舎生）三君ノ卒業祝賀兼送別会ヲ行ウ。来賓トシテ鈴木、笹部、山口、奥田、今井ノ諸先輩見エル。因ミニ当日ノ委員ハ杉本、多勢、時田、矢田、白根、柴内ノ六君ナリ。

先ヅ委員ノ一人トシテ時田君開会ノ辞ヲ述べ、竝セテ懐シキ言葉ヲ贈リテ去ル人ヘノ餞トサル。次イデ波木居副舎長立チテ笹田、土井両君在舎中ノ功績ヲ頌シ、一方ソノ秀ダタル性格ヲ称ヘテ降壇、終ッテ笹田、土井両君ノ答辭的挨拶アリタリ。思ウニ土井君ハソノ専攻タル昆虫ニ対スル造詣ノ深キコト驚クニ堪ウ可ク、竝セテ円満ナル人格ノ所持有タリ。而シテ又極メテユーモアニ富ミ、時ニ満場ヲシテ抱腹絶倒セシムルコト有リ。笹田君ハ資性至ッテ真面目ニシテ又ソノ学問ニ対スル熱心サハ眞ニ喫驚ニ値スベシ、一方人間トシテ稀ニ見ル親切篤実ノ士也、多年舎ニ在リテ専ラカヲ我舎ノ繁栄ニ致シ、殊ニ舎ノ新築ニ当リテハ犠牲的奮斗ヲ惜マザリシ。小林君近く学校ヲ去ラントスルニ際シ「北海道ノ将来」ト題シテ日常研究ノ一端ヲ極メテ雄弁ニ話サル。今ヤ人口問題、食糧問題ニ行詰マレル我日本ハ北海道ノ地ヲ得テソノ廣大ナル地域ト豊富ナル天産トニ因リ必ズヤ光明ニ輝ク将来ヲ持ち来サント断ゼラル。次イデ矢口、平野、平戸ノ諸君立チテ各自送別ノ言葉ヲ述ベラレ併セテ或ハ一般国民風紀ノ頽廢ヲ嘆キ或ハ總長ノ演説ノ受ケ売リニ或ハ虚無ヲ排シテ生命ノ謳歌ニ堂々タル大氣焰ヲ吐カレタリ。最後ニ諸先輩ノ送別ノ辞アリテ会ヲ閉ヅ、時二十一時半。

追テ当日左ノ寄附アリタリ。

一円五十銭 山口君、笹部君、亀井君、今井君

五円 鈴木先生 二円 北村氏

二月二十五日 左ノ雑誌ヲ購入ス

ゴーラ、運命ノ秋、山行、軍隊社会の研究、異国行脚

「櫓ノ音」ヲ発行ス、原稿ノ集マラザルハ遺憾ナリ。

三月一日 玄關ニ於イテ記念写真ヲ撮影ス。

三月三日 本日予科試験科目ノ発表アリ、一般ニ緊張ノ模様現ハレズ。

三月六日 笹田、土井両君ヨリ卒業ニ際シ左ノ寄附アリタリ。

金六円也 笹田君

金六円也 土井君

三月九日 夕食后特別室ニ於イテ離別会兼月次会ノ相談ヲナス、委員左ノ諸君

伊勢田君、濱本君、笹部君、福島

三月十一日 予科ノ試験愈々今日ヨリ始ル。

三月十三日 平野君不幸ニシテ盲腸炎ニ罹リ手術ノ為大学病院ニ入院セラル。夜矢口君帰省ノ途ニ付カル、台湾ニ旅行サルハ由。

三月十五日 夜赤羽君帰ラル、矢口君等ト一緒ニ台湾旅行ヲ試ミラル由。

三月十七日 月次会ヲ行ウ、会序左ノ如シ

一、開会ノ辞

一、副舎長選挙

一、新副舎長ノ挨拶

一、旧副舎長ノ挨拶

一、舎生演説

一、先生御訓話

一、閉会ノ辞 茶菓

宮部先生、亀井、今井ノ二先輩ノ御出席アリ、最初先生選挙委員長トナリ副舎長ノ選挙ヲ行ウ。其ノ結果矢田君過半ノ大多数ヲ以ッテ当選サル。閉会后各部委員ノ選挙、文芸部ノ競売、へボヌキアリ其ノ結果左ノ如シ。

会計部 江尻君 (旧 浜本君)

衛生部 杉本君 (伊勢田君)

運動部 伊東君 (笹部君)

食事部 平川君 (矢口君)

文芸部 平戸君 (福富)

三月十八日 樂シキ休暇トナリ帰省サル方続出ス。本日ノ帰省者左ノ如シ。

朝—多勢、伊勢田、伊東、樋浦ノ諸君

夕—平川、西瀉ノ諸君

晩—笹部、柴内ノ諸君

三月十九日 前文芸部福富君ヨリ新委員平戸事務引継グ。舎ノ空気漸く寂莫ヲ感ズ。懂レ

ノ桜咲ク南国ノ春、懐シキ父母ノ膝下ヘト旅ヲ急グ。今朝杉本君出発、健男子福島君独り雪ノ山ヲ征服ニ青山ノ合宿ヘ向ケ出発ス。今朝ノ新聞又々東京日暮里ノ大火ヲ報ズ。都会生活ノ不安又大ナリト云ウ可シ。

三月二十日 今朝平戸君、川島君軟かな陽光をあびて帰省せらる、夕に至り濱本君故郷に向ひ出発さる。

三月二十二日 北国の冬のシンボルである三月にはまれに見る吹雪を苦にせず江尻君、近藤君父母の下に急がる。

三月二十三日 波木居君晩の九時にて帰省せらる。

三月二十四日 時田君昨夜のつかれも苦にせず朝七時にて出発せんとして時計の失策により午後の四時まで待たさる。本日は福富君スキーの合宿より帰らる。インディアンカラーの顔にて元気益々旺盛。

三月二十六日 朝六時にて福富君帰省せらる。

午後一時盲腸炎に病み大学病院に入院中なりし平野君帰舎、稍やせたりといえども口に刀あり。

四月一日 平野君笹田君岩見澤にむけ旅行或は帰省と八時出発す。在舎生三人静かなる舎一層の沈黙に陥る。

四月三日 午後三時 平野君帰舎。

四月四日 十時笹田君帰舎

四月五日 朝の汽車にて平野君故郷に向ひて走る。笹田君退舎す。

四月六日 白根君退舎す。

四月七日 午後十時樋浦君帰舎す。

四月八日 朝、江尻君帰舎す。

四月九日 朝、杉本君帰舎す。

四月十日 夜、多瀬君帰舎す。

四月十一日 夜、多瀬君旅行の為に舎を立つ。

四月十二日 朝、伊東、西潟、浜本三君帰舎す。夜、川島、平戸両君帰舎する。平野君夕の汽車にて帰舎さる。舎の周囲に残る醜い雪の形骸、北上ノ者をうんざりさす。

四月十三日 土井君遂に帰省せらる。夜嵐吹きすさびて何となく物淋しき夜なり。

四月十四日 朝、伊勢田、笹部の両君大元気にて帰舎せらる。伊勢田君花ニ浮れて帰るのは惜しかりしとこぼす。

四月十六日 朝、多瀬君陽光を浴びて帰舎さる。舎内の元気頓に振ふ。時田君相次いで帰舎さる。農科予科一年寺尾邦彦君（十号）、工科予科一年佐々木武尚君（六号）入舎せらる。

四月十七日 朝柴内君帰舎さる。近頃珍しい好天気、前の植物園に足を向ける者多し。夜近藤君帰舎せらる。

四月十八日 小春日和が続く、校庭のローンが青みゆく様が眼に付く。初めて雲雀の声を

聞く。楡の芽が膨む。一朝毎に深みゆく石狩の春は進む。午後、土曜日を期して大学のローラーを一同うんこらえんこら引張る。是から温い土が踏める。春の日のもっとも大いなる享樂、おゝそれは是からだ。

四月十九日 新聞によると近頃の陽気は珍現象であって、今日の午後の如き七十六度の高温で春と夏が一緒に来たようだ。日曜を幸ひ、朝からテニスコートの修繕に忙しかった。白線鮮かに本年最初の幕は切り落された。夜、平川君帰舎せらる（食事あり）、夜十時福島君帰舎せらる。

四月二十二日 天気毎日清々晴朗、今日赤羽君より大連上陸の知らせあり、南満より北満を見学して来月上旬帰札せらるゝよし。

四月二十三日 矢口君朝の汽車で帰舎さる。台湾の蛮地跣足を踏み入れた君も、今はつゝがなく舎に戻る事が出来て嬉しそうな顔をする。土産に台湾式に髪を刈って来た。

四月二十五日 春雨静かに紅塵汚■の地に恵み、清涼骨に沁む。落葉松芽ぐみて既に青し。午後平野君岩見澤へ行かる。

四月二十六日 日曜を幸ひ一同総出にて玄関前から池の周囲を綺麗にする。面目改まって別荘のようになった。東側にくじの当らんことを祈念するも宣なる哉。

夜、部屋換え組合せ発表あり。

笹部君、多勢君八号 土井君、伊藤君五号 平野君、樋浦君十号

時田君、佐々木君六号 杉本君、寺尾君十二号 矢口君、柴内君七号

赤羽君、伊勢田君二号 平川君、平戸君十一号 江尻君、浜本君九号

四月二十八日 今朝早朝に起きて室換へを行ふ。而して吉は春日なり。今朝近所の踏切にて自殺者あり。

四月二十九日 今朝波木居君帰舎せらる。快晴静穏。春の日の行樂を追ふて散歩する者多し、日中は初夏の気分も変りなし。

五月 新学年最初の月次会を開く。委員、江尻、矢口、平野、平川諸君の努力により、あっさり初夏の御馳走に腹を満す。

平川君開会を述べられ新入生諸君の歓迎会を宣す。副舎長矢田君の新入生に対する希望を述べられ、次に寺尾君自己紹介をなして新進気鋭を示さる。佐々木君次で自己紹介をなされ、始め海兵に合格したるも健康の関係上方向転換され遂に当大学に入れる経路をとき、自分は人も知つたる信州の山猿であるから以后も飽く迄山猿（止まざる）様に生きて行きたいと洒落て降壇、次に伊勢田君立ちて札都に来た迄の回顧を話さる。君一流の滑稽味を出して札幌に美人少きを嘆じた。

矢口君 台湾洋行の土産話をする。基隆から台北その他生蕃の部落の見学から首狩の話等吾人の珍とすべき話を承る。

時田君 ドフトエフスキーの神秘説から発して、吾々人間生存の意味は実に要領を得ぬ神秘なものである。吾人の現在のあるものを考へれば、其れが実に腐敗であり禽獸に等しきものであり、又一面から見れば人間は最も高く尚きものである。高きが故に誇ら

ず、醜なるが故に悲観もせぬ、この間に立ちて吾人の生存は神秘であると結んで退く。

山口千之助氏 例のひょうきんな恰好で亦学校生活を始められたと述べられる。

小林忠五郎氏 新調の背広にて社会に出た感じ、自然が芽ざむ様、是れ温き現在の音調とあっさり片付ける。

犬飼助教授 鼻を貰ふと嬉しいそうだが俺はもう一年になるが段々悲観的になる。是は唯、新山空気アトモスフェアの転換する為であろう。且又アトモスフェアの転換は有意義である。之迄に一番嬉しいと思ったことが三つある。中学に入った件、予科に入った件、学士となって背広を着た時である由。之皆アトモスフェアの転換する為めである。と嬉しい話許りして退壇。

平野君の閉会の辞に終る。宮部先生の御出でなかりしは残念である。会終つて吉例へボヌキ会を催す。犬飼さん、千さん大童となって活動す。再四、西側の勝利に終る。

五月九日 吾の中は益々春である。而も爛熟した燃えるような春である。あわれ花に飢え美に恵まれぬ北国に一度の春の女神の訪れ、総てを忘れ只歓喜の現実である。異様な道化た奴等が底抜け騒ぎの最中である。戯れ踊る足並は死から蘇った胡蝶の様に、今なほ歓楽の絶頂である。

「鐘一つ売れぬ日もなし江戸の春」

うらさびた北江戸にもこんな情緒がないでもない。空には横須賀から来た大泊への飛行機がとぶ。亢奮した氣勢は昇る。明日は国を挙げて御慶事を祝ぐ銀婚の佳日である。

午後一時半より中央講堂にて早大教授、大山郁夫氏の「社会科学の人生価値」と題して流暢な演説あり。

五月十日 麗かに大典を祝ぐ日は晴れて瑞気漲り渡る。大婚の後二十五星霜、是に国の確固たる礎は金鉄の堅きに至ったのである。

あっちこっちで節婦貞夫の表彰がある。提灯行列がある、花電車が通る。煙花が上る。おまけに国花の満開時分だ。お目出度い気分皆一日を過した。

土井久作君退舎せらる。我舎は惜む可き人を失ったこと悲しむのである。君は実にユーマアの最も濃厚なそして若人になくはならない元気のよい人であった。叱咤し怒号し大笑して、最も屈曲にもとんだ瞬間を過される方である。今年は本科生となられた。君の刀痛を入れた研究は、静かな下宿生活によって益々うん奥を極められんことを祈るのである。

五月十一日 赤羽君長途の旅行に疲れも見せず、朝陽をあびて帰舎さる。学校は大典の翌日とて臨時休業。野幌へゆくものあり、花を見る者もあり。

五月十五日 遠く社会を退いて超然的な気分の我が寄宿舎にも、春の気分は沸き起った。

吾の中は益々駘蕩たるものである。円山の桜は今こそ花盛り、皆五時に叩き起されて辛い花見に出かける。大和魂の表徴は雄々しく散る。野人二十の頭の上へ可憐な片々が雪の様に降りかゝって来る。参拝を済して御馳走を披露する。へボヌケに景気を付けて帰る。夜の雑沓に比べて朝のそれは全く爛たる花に酔ふのである。朴人の集いはかくし

て人並に花に浮かれて来た。

五月十六日 春季大掃除が始った。今朝から早速大掃除を各室で行ふ。杉本さんから一流の余太が飛んで来た。江尻君は名の如く相変らず横綱がほ振ってる。

五月二十四日 昨日午前十一時に関西地方に大地震ありし由、昨夕から来る頻々たる電報に驚かされた。新聞によると都会にはさしたる被害もなかった様だ。城ヶ崎温泉全滅と云う様な記事もある。此の際流言蜚語は重ね□□慎む可きである。折角の土曜日曜も春雨に打沈んで皆コボスコト□□□。

五月三十日 今月月次会を開く。委員、波木居、赤羽、樋浦、平戸の諸君。胃の腑がつつ張るほどの御馳走あって先づ皆一同満足、七時半開会、宮部先生、亀井氏、千さん御出で下された。樋浦氏開会を述べられ、矢田副舎長あっさり

Everything is something, Something is everything

とやつのけ降壇。

平野君 我舎に於けるお国自慢の大家、陸奥の歴史的由緒から長いこと御吹きになる。

伊瀬田君 鋭鋒避く所なき舌端、都会人を持ってわをなせる平野君の尾を捕えてこき下す、満場をして抱腹せしむ、代って

赤羽君立ち台湾、満州、朝鮮方面大旅行の土産話をやられる。満州の異国的気分浸ってすっかり軍国的観念を鼓吹せにやならぬという気分になったと愛国的情熱を高調して退く。

伊東君 いやさかと萬歳という区別について論じ、いやさかという典雅な言を我が皇室の讚美に用いたいと結ぶ。

笹部君 鉄砲を初めてもった嬉しさに軍事教育に大讃成の声を上げて頼母しい愛国者を氣どった。

柴内君 同じく軍事教育等につき論じて、アイスクリームの少きを嘆じ食意地のはった希望をのべて降壇。

波木居君 四月中旅行の風呂敷を拵げて、吾人の見識は大ならざる可らずと云う様な具合に大いに旅行気分を誇張した。

山口千之助氏 氏の快弁を以ってすれば満座為めに絶倒す。若い思い出を話して、談浅間山噴火口■險に及ぶや、その滑稽なる、臍を保護する必要がある。

亀井氏 ホームシックに就いて思出を話され、現今流行のお国自慢の如きも、一つの懐郷的、愛着的郷土心の発露なりとやつのけ、その道の闘士をして悟道を開かしたものは愉快。

宮部先生、九州方面旅行のお話しをして下さった。いつも乍ら若い者も抑えられそうな大元氣である。旅行中、舎の先輩大小島氏の新婚旅行を捕まへたのは先生却々抜目がない。先生の御先祖先視に就ても甚だ面白い御話を承った。却々由緒ある僧(強い坊主)が現在の先生のご先祖で、太閤の臣で武勇の名高き豪傑坊主であった由である。

会を終わって新聞競売を済ませ十二時散開した。

六月四日 大学文武会の遠足で軽川に鈴蘭狩りを催した。我舎の人々は室蘭方面へリリー狩りにゆく人、軽川にゆく人、手稲登山をやる人で殆ど出払った。手稲登山は天気晴朗の為め殊に愉快であった。当日の登山者、伊勢田、伊東、福富、近藤、平戸の五名であとから矢口、笹部、江尻、浜本の四君が昇った。

六月五日 昨日修学旅行の慰労として本日授業二時間、三限より田中館博士の国字問題に関する講演があった。岩見澤方面大火にて三百六十戸消失の報伝わる。

六月七日 北大予科対小樽高商野球戦の日である。両洛に火花を散らす一高と三高との戦と気分を同じくする、何れ劣らぬ若人の意気の戦である。武運拙く五対四のスコアで予科惜敗とは残念。

六月九日 世の中春になると、そろ□□人の心もどよめいてくる。此の頃舎の近所に悪漢棲息して甚だ物騒である。午前中に二号（赤羽、伊勢田君）の部屋に押入って貴重品数点を盗み去った。何とかして逮捕したいものである。

六月十日 救世軍大佐山室軍平氏の講演があった。演題は「余の救世軍に入れる径路」と題するものであった。

六月十一日 朝の汽車にて川島三二君帰舎さる。宿望の徴兵検査も已に済んで甲種合格とは目出度し。

六月十七日 東朝専務下村宏氏講演ありたり。

六月十八日 予科試験期日発表さる。各員一層奮励すべきである。

六月十九日 北海尚志社中に寄宿中の先輩山口千之助氏腸チフスにて天守病院に入院の由、下記伝染病は是からである。互にあんまりいぢを汚くしない方がいゝ。

六月二十日 月次会を開く。委員川島、伊東、佐々木、近藤君。鈴木先生、今井氏、笹部し御出席下さる。

近藤君の開会の辞に次いで矢田副舎長立ち、多勢君、西潟君、樋浦君、佐々木君、川島君等交々立ちて熱弁を奮い、又名論卓談を披歴して若人の意気を示した。

今井氏落し話をして皆を笑はせ、最後に鈴木先生現在の教育の不徹底、ノート制度の不備を突いて先生の苦心を述べらる。川島君の閉会之辞に終る。宮部先生事故の御出席なきは残念。委員選挙の結果は左の如し

文芸 時田君 衛生 近藤君 食事 笹部君 運動 多勢君
会計 樋浦君

六月二十五日 平川好文君東京にて徴兵検査の為九時急行にて帰省さる。試験日割発表され、漸く学期末の気分になる。

七月一日 朝、多勢君旅行に出かける前に一先づ帰省と出発さる。柴内君朝九時の汽車にて実習の為め苫小牧へ赴る。

七月三日 予科試験始まる。怠け者コンデーをとりて怨嗟の声到る所に高し。勉強は、ずべる可からず。

七月四日 梅雨の模様にて数日来雨降り続き陰鬱なること甚だしい。午後一時半より長谷川如是閑の講演開かる。

七月五日 日曜、雨漸く晴れ、上空を飛行機盛んにとぶ。樋浦大三君帰省の大蓋を切って、愛知方面へ旅立たる。

七月六日 濱本君試験終るや否や忽ち矢の如くに帰省さる。

七月七日 赤羽君今夕帰途につかる。舎の内もだん□□休暇らしい気分が漲って来た。

七月九日 伊勢田、西瀉両君帰省、時田君、むろらんに旅行、柴内君帰舎す。

七月十日 佐々木君夕六時山の国へ向け出発。

七月十一日 寺尾君帰省さる。伊東君利尻へ向け旅行。

七月十二日 江尻君朝岐阜へ向け出発。

七月十三日 福富君水泳合宿の為め余市へ赴く。

七月十四日 杉本君夜帰省、平野君朝帰省さる。小林さん来る。テニスの熱心なる一同大いに抑へらる。

七月十六日 柴内君夕帰省、波木井君令弟訪問さる。当分当舎に宿泊の由。

七月十七日 夕伊東君帰省さる。

九月二十三日 此日休日を利用して、舎のテニス大会を催す。運動部の努力によって連日の曇天、小雨にしめり勝ちなりしコートの水も排出され、半日の日照後は絶好のコートとはなった。

午前九時半、紅白試合の幕切って落さる。

白軍利あらずして大敗。好プレイヤーたる笹部君も年の功には敵し難く見え、白軍の計画がうりと外れて、氣勢遂に恢復に到らず。晝、汁粉の馳走あり。

午後、籤引きで試合する。優勝者はしらね・柴内組なり。賞品は、皆の渴望してやまぬ、奮斗の大動力たりし一箱のシュークリームにてある。賞品授与あり、夜の食事として牛鍋をつまいて歓談す。波木居君今朝旅行に出られる。二、三泊の予定らしい。

九月二十四日 予科、実科専門部発火演習。朝よりリュックに詰めたる兵糧もよろしく、演習に行くべき諸氏こぞって出立したのは愉快だ。残ったのは、本科マン四名。演習地は月寒で、一泊を野宿する予定とかや、行け、若者！ミリタリズムの残渣は棄てておいでよし。精神を味ひ、人生苦難の耐久訓練の一助となし得たらんか、幸、家に蟄居するに如くこと無きなり。

本科マンの四人、夜多勢君の室で菓子を食って懇談する。

九月二十五日 彼等帰る。

無事、健児ら家に帰る。唯一人笹部君、不快の模様で、夜三十九度二分の熱がある。

同室の多勢君午前二時、熱の稍下るまで看病していたそうだ。朝、恢復して結構。

九月二十六日 月次会

委員、多勢君、杉本君、芝内君、西瀉君。

あっさりとした、しかし腹に充つる馳走はよかった。来賓、宮部先生、鈴木氏、足立氏、亀井氏、奥田氏を迎へる。

西潟高一 開会の辞

矢田茂夫 副舎長の挨拶を兼ね、香川県に於ける耕牛使用の経済状態を語る。香川県は農耕地域全土を占め、牧畜地の余地なし。よって徳島県より牛を一頭につき米五斗の割で借り来ると云ふ。独逸にその例あれど、日本には既にすたって、香川一県を残すのみ。

川島三二 夏休みの旅行談。支笏、樽前山、マカリヌプリをめぐって遂に横浜から樺太アンベツに周遊したテンマツで、幌内川の風光や、海豹島（ロッペントウ）の模様大いによし。

笹部三郎(委員の催促に、他舎生の応ぜずして尻重きを批難しつゝ)「苦しみを讃える」を読みと題して語る。国家の盛衰は国民の精神と関聯すること大なるものあり。見よ時宗が元を一蹴する所か、一敗地にまみれて退きはしたものゝ、国民の一致的精神の旺盛により以って芳史の一頁を汚さずして済みし如き。国家に於ける物質的豊饒と国民的人格の結合一致とは往々にして反す。今日の日本も、安逸によって国民のくさり弛みたる観あるをうらむ。

伊藤豊治 伊豆大島旅行談。東京への発着時間だけが一定していて、その他は何処に何日滞在するか、漂流するかしれない、怪しげな身の旅行。

時田郁 根室、国後旅行の一端を披瀝する。人生観を論じかけて中止。

奥田氏 今や自分は社会へのプロセスの中途に在り。根室の回生病院の生活中、平均毎週一人の死人に逢日、将来、必ず幾度となく経験しなくてはならないシーンに慣れた云々と。

亀井氏 日常の処置を崇高にまで至らすためし、亦横に振れぬ確信を得ず。

足立氏 大きな流れ（優越なるスタートという流れ）に乗じて、依頼心を唯一の望みのキズナとしていた男の実社会に出た有様。何の縁故も、先輩も、有力な紹介もなくして孤立、税関にとびこまなければならなかった彼。彼は学生時代の夢を幻滅と悲しみはしたものの、奮闘遂に数年にして十数の著書をものし、税関に於ける重要な文献さへ出したので、忽ち注目、尊重さるゝに至り、単身遂に身を立てた。彼に学ぶべき点は何処であるかに留意せよ。現実には扮装の世界に非ず。彼は学生時代、ナタを作っていた。社会に出てからの適応は、カミソリの役目である。準備時代から基礎を作ることが肝要だ。彼はノートの一宇一句には拘泥しないで、大掴みにすることができた男である。扮装を止めよ！下地を鍛えよ。何時でも下地さへあれば、カミソリにはなれる。座談を止めよ！雑談の時間が何になるか？緊張味ある秋、殊に札幌に於てももの凄く冬を迎える此の恵まれたシーズンを用いよ！内地に対して吾らの有する強味は此処だ！（若々しい君の叫びは我ら共鳴措く能はぬものなり）

鈴木限三氏 曾て、処世法は「不得要領たるに在る」と教へられたことがある。

Boys be ambitious

(ダビット・某著 満足の中の何とか云ふ書から引いて) 我を忘れた work なき produce! 突立ち止まるとき、静止者に同情が有てるのを見出す。病気になって田舎へ引きこもっても、唯 success をめがけて、無暗に働く場合多し。文化生活を目的に努力する人々、直に見、考ふべきものを忘れること多し。

体裁よく出来ると云うことより、ゆっくりかまへて、根本的のものを努めるを可とす。Success とは離れても、生きるには之こそ大切である。食ふ他に、眞の欲望、考ふことを忘るべからず。

宮部先生「人間万事健康にあり」てふ句をモットーとせる馬越長平氏の著を紹介さる。元山氏の実験談を読み聞かせ、健康要領を列挙さる。先づ、食慾をつゝしみ、腹八分目とすること。朝起きをなして冷水浴によって身体を丈夫にすること。心配はすべし、心痛するな。気を愉快に保つこと。菓は禁ずべし、酒は節すべしと。但し著者はビール会社々員にパンフレットを配布せる也。(青年よろしく人生の大計を立つるに当って此要領に律して生活する位の意気と、決断有って然るべき也。「腹も身の中」要心※※。)

菓子、茶、トマト、リンゴを食して散ず。

会后、新聞の競売をする。(略)

九月二十七日 夜、波木居君帰舎さる。

十月二日 夕方より室換をする。新組合せ及同室芳名左の如し。

一号 矢口君	七号 平戸君、寺尾君
二号 伊東君、佐々木君	八号 杉本君、平川君
三号 多勢君、宮脇君	九号 時田君、濱本君
四号 川島君、福富君	十号 西瀉君、笹部君
五号 江尻君、柴内君	十一号 平野君、近藤君
六号 樋浦君、伊勢田君	十二号 波木居君

十月九日 基督教青年会とのテニス仕合

午后、大風と土の湿りのために躊躇せるも、両軍の意気遂に之ら障碍を物ともせず、基督教青年会寄宿舍のコートにて相見ゆることとなった。北風真向にコートに縦断するのには、不慣れな我軍の閉口した所であった。結局、彼我両軍共、優待二組を残し、彼に尚大将残ってドロソ、ゲームとする。

南瓜と枝豆の馳走あり。帰舎后、祝勝会と称してシルコを食ふ。夕方、林実二年、宮脇堅太郎君入舎せらる。

十月十日 大掃除

此日に前後して、各室大掃除をなす。秋日和続きで、日光消毒の効、顕著なこと疑なし。

十月十二日 記念会祝歌募集廣告をなす。

記念会の準備委員の割当て発表ありたり。

饗宴部 委員長 笹部

委員 矢口、平野、平川、杉本、柴内、川島
余興部 委員長 多勢
委員 平戸、福富、伊勢田、西潟、寺尾、佐々木
装飾部 委員長 時田
委員 江尻、浜本、近藤、伊東
庶務接待係 係長 矢田
委員 波木居、樋浦、宮脇
記念会を期して楓林の原稿を募り始む。

「キラ入れ」三枚宛配る。

十月十七日 手稲山登山

早朝六時起床、各自弁当持参で午前七時三十五分の列車で出発する。休日のこととて、早朝とは云へ既に詰めかけた人々の群は列をなして出札口の前にあり。舎生と一緒に買い貰ひ損じた某の如きは、対に殆ど殿を承り、二、三分引きも切らぬ乗客のために出発を見合せたる列車に、公然の黙許で線路を踏み越えて、今や発車と云う奴に、ともかくも乗り込んだ始末。出発早々の悲喜劇なり。天気晴朗、雲亦多し。一行十八人、路を光風館入口に取る。

或善良なる指導者現はれ、登山料一人前金五銭也を儲けんとの野心を起し、輿論を喚起して同志十数名、何とも云わずに橋を渡り、登り口の急坂を走り上らんとする。橋のたもとの自動車小屋にて此の様子を見て取ったる運転手二名、ヤニハに躍り出て、追求甚だ急にして酷、恰も空き巣ねらいか、こそどろを駆り立つるが如し、せめて「富樫」位の見識はあっても良さそうなものを。「よし、なぐりつけてやれ！」とばかり近道を走り上り行くと、キッと見定めたのか？此方は味方形勢不利なりと見た後続部隊五、六人。早速二十人分の登山料を拂ひ、切符を手にして、運転手の跡を追及すると云う段取。あとは推量。

涼風絶えず雲間より吹き来って、第一の難所も、さしてアゴを出す仁を見ずして無事通過。

秋色ユタカナ山道をすぎ、或は山谷を見下し、第二の峠でニギリ一個を食ひ、「光苔」を過ぎ左山腹に涼風を入れ、青葉城を逍遥する心持で歩みゆく。手稲の妙味は、実に此処にある。頂上は冷涼に過ぎて暫くも止りはしないのだ。眺望も甚くいはい可でない。Hill wonderer は、大いに報ひられるわけだ。二組、三組の登山者に頂で会った。帰途は澤にとり、溪流を渡って全く暑さを知らない。忽ち、ふりかへるはるかの空に、手稲山頂は再びファミリーな屋根形を、濃い夢色に浮ばせ、近寄り難い威厳を取返しているのである。

夕食は、牛鍋をつまいて一日の歡を納める。今朝から西潟君は柔道合宿に行く。

十月二十日 夜、波木居君退舎、移転される。

特別室に一同会して、波木居君の挨拶を承り、且つ茶菓に与る。君は四年六ヶ月此舎に暮され、昨一ヶ年は副舎長として大いに尽力され、我々舎生に深い感銘を残されたの

であった。君のよく云われたことは、一度入舎したからには、出来るだけ長く舎を出ない方が良くと云ふのである。今にして君先づ去らんとす。理由無かるべからず、よって挨拶すると云う。君の学校の講義は十一月半を以って終了し、来三月まで授業、実習全くなし。唯試験あるのみ。依って生活は忙しいと同時に不規則で、舎生一般と歩調を合せ得ない。宜しくない影響を及すを怖れること第一、第二は、時分の都合も、同輩の集っている下宿屋に行くを利とすること。卒業後は海軍に入るが、六月一十二月を除いては、軍港その他内地にいること故、立ち寄られたし、尚飛行機、軍艦登乗の希望には、出来るだけ便宜を取計ふつもりである云々。

十月二十一日

欠落（記載なし）

十二月二十五日

十二月二十六日 数日来の大暴風雪も何処へか去り気持良き好天気となる。笹部、時田の両者夫々懐しい故郷へ向け出発さる。

二十七日 午前四時起床して餅搗きをやる。

僅か二斗の餅を搗くのに大の男七、八人もいてだいぶへバツタらしく見へたのは残念だ、一人で搗き了せる程の勇者無きか。自称老人江尻君の餅搗き格好、中々好評を博す。ほのぼのと夜の白み行く頃に到って餅搗終る。

三十日 夜石澤氏追悼の茶話会を特別式にて催す。

三十一日 夜は七面鳥のスキ焼を喰った。腹のふくるゝ程喰った。いくら親ぢの膝下に帰った処で、七面鳥のスキ焼は喰へまい。

七面鳥どころか一面鳥も喰へまい。七面鳥を鱈ふく喰いたい人は来年から舎に留ることだ。夕食後は二号室に一同集って深更までトランプをして遊んだ。去りゆく大正十四年を思ふ存分享樂した殷々とし除夜の鐘の鳴り響く頃、四、五人の者は円山神社へ参拝した。電車が終夜運転してもはこび切れない程の人手だったそうだ。